

新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

実は新年早々、インフルエンザA型にかかってしまい、出勤を控えている中で今月号を書いています。

そもそも一昨年まで、この30年近く私はインフルエンザどころか、病気らしい病気をすることなく過ごしてきました。わが家の子ども達が小さい頃など、子どもがインフルエンザにかかると一緒に部屋で寝るのは私の役目でした。なんせ、私は「インフルエンザにはかからない」と思い込んでいましたし、現にうつったことが無かったからです。ところが、一昨年、まさかのインフルエンザにかかってしまい、20数年ぶりに高熱を出して寝込み、今年も新年早々からインフルエンザでダウン。加齢による抵抗力の衰えを実感せざるを得ません。

これまでの私は「病気に強い」と自信過剰だったのです。ところが、今回、情けないことに職員のなかで真っ先にインフルエンザにかかってしまい、申し訳ないやら、情けないやらで、もう、がっかりです。自分は病気に強いと言えなくなり、おまけに年齢を言い訳にしたりとすっかり自信を無くしているわけです。このもろくも崩れ去る「自信」ってなんなんだ？とか考えているときに、ちょうど最近読んだ本で、「有能感」と「優越感」のことが書いてあったのを思いだし、今回のテーマを「有能感」と「優越感」にしようと思ったのでした。

「有能感」と「優越感」

まず「優越感」というのは、どちらが上手にできるか、あるいは、どちらが優れているかについて他の人と比較して、自分の方が優れていると確信したときに感じるものです。たとえば、かけっこして相手に勝ったとか、椅子取りゲームで最後まで残ったなどのように、他の人と競争して勝ったときに感じるあの気持ちです。

それに対して、「有能感」は、コマが回せるようになったとか、けん玉の難しい技を練習してできるようになったとか、ピカピカの泥団子を作りあげたときなどのように、自分でコツコツがんばってやり遂げたとか、出来なかったことを一生懸命練習してできるようになった時の「できた！」を積み重ねて、「がんばったら自分にもできるんだ！」という自分に対する自信というか、自分の力を信じられるようになる気持ちのことです。

子ども達には、「優越感」よりも、「有能感」を育んでいきたいなと思います。人と比べて、ではなく、「自分が自分の力を信じられるように」。

どうやったら、有能感を育てることができるのか？それは、子どもをよく見て、子どもの思いに共感してあげることです。子どもは小さなことでも何かやり遂げた時に、きっとそばに居る大人に共感を求めて目を合わせるはずです。そのときに、「上から目線」で褒めるのではなく、「やったー！できたね！」と一緒に喜んで喜ぶのです。もちろん、悔しがってるとき、悲しがっているときにも共感してあげて下さい。

よく、「子どもは褒めて育てましょう」と言われますが、「褒めすぎ」には注意が必要です。もちろん、叱ってばかりの子育てよりは、褒めて育てた方が良いに決まっています。しかし、叱るのも褒めるのも、結局は大人から見たこもの「評価」であって、大人の思い通りに子どもを支配しようとしていることになります。褒めてばかりいると、子どもはそのうち、「褒められるために」行動するようになってしまいます。そうすると、がんばったのに褒めてもらえないなどと、ひがんだり、怒って反発したり、無気力になったり…。そのように、大人の顔色を伺って行動するようになってしまうことがあります。それでは困りますよね。人の顔色を伺うのではなく、自分で考えて行動できる人になってほしいものです。もちろん、相手の顔色を気にしないでというのは、人の意見に耳を貸すという意味ではありません。人の言うことにはしっかり耳を傾けてほしいですが、人の意見も聞きつつ、自分は思うのか、自分の考えや意見をしっかり持ち、話し合いを通して、お互いの納得できる答えを探し、その上で行動できる、そんな人に育って欲しいと思うのです。